

# 状況の中に埋没しているだけだったら 保育者の自我の成長はない

津守 真

子どもたちの間で物の取り合いのようなことが起こったとき、大人は、眼前の状況で、大人の価値判断によって、どちらかを善とし、あるいは悪として、その間を裁き、またとりなしをしようとする。しばらく時間が経って子どものおかれている全体状況が分かってくる、そんな大人の価値観だけで割り切れないことが分かってくる。

—

四歳のA子は、傍らにいた男の子のT雄と一緒に、母親とホットケーキを焼いていた。私は足の悪いSくんと一緒に床の上をひざで移動していた。

Sくんはホットケーキを見つけると、まっすぐに這ってゆき、A子のホットケーキを一

切れ糺んだ。それは一瞬の出来事だった。

A子は激しく泣いて泣きやまなかった。私も母親も何か言いながら、ゆずらないA子の前に立ちつくした。その声に、一緒にホットケーキを焼いていたT雄も泣いた。

Sくんは日頃、発作が多く、睡眠も不規則で、休む日が多い。

A子が激しく泣いたとき、こんなに弱いSくんがようやく自分の力で手を伸ばしたホットケーキだから、一切くらい分けてあげても当然ではないかと私は思った。そんな私がどんなことばをかけてもA子はゆずらず、もっと激しく泣いた。A子は、弱い子にゆずることは頭で分かっているにもかかわらずその場の気持ちが入り込まなかった。大人が傍らにいても状況を複雑にするばかりだろう。私はSくんを誘ってその場をはなれた。

## 二

A子の母親は、私共の養護学校の幼稚部に在籍している兄と一緒に、ほとんど毎日A子連れて保育に参加している。そのほかにも二、三名、母親や弟妹が保育に加わっている。私共は、これを統合保育のひとつの形と考えて歓迎している。保育の中では母親は私共の同労者である。この日断らずに他人のホットケーキを取ったSくんに対して、私が叱らなかつたことをA子は怒つたのだろうと、私は母親と話した。家庭でも兄との間でしばしばこういうことは起こるのだそうである。

A子は、障害の子どもと自分とを区別していない。A子にとっては、障害の子も自分も対等である。障害の子が弱者で健康な子どもが強者だという図式もまだできていない。A子の人間観は徹底している。私のことばかけは、こういうA子の問題意識にふれなかった。そのあといつのまにか、私共はさっきのことは忘れて一緒になって動き回って楽しんでだ。

### 三

次の日、保育の中で忙しく過ごした午後、私はこの母親と保育室で出会った。きのう、帰り道A子はいい機嫌で、帰宅してからも、とても良い子だったんですと母親は言った。夜も、自分からお風呂に入り、衣服をきれいにたたんだ。寝るときA子は母親にしみじみと「あたし大きくなったら、T雄さんと結婚するの」と言った。母親がどうしてとたずねると、「T雄くんは、あたしが泣いたときに一緒に泣いてくれた」と話した。

そのことから思い返してみると、あのとき、朝からT雄とA子はホットケーキと一緒に作っていて、とても楽しく盛り上がっていた。A子はもっとそれをつづけたかったのに、その楽しかった共同のひとときが、S夫が手を伸ばしてホットケーキを取ったあの瞬間に破られてしまった。A子にしてみると何よりもそのことが残念だったことが分かる。

あのとき、外部の大人の眼からは、「何故そんなに頑固に泣きつづけるのか」「もっとS夫のことを分かってくれてもよいものを」と考えるが、大人が考えるようにA子が我儘

だったわけではない。子どもが生きていた状況は、それとは違う次元のことだった。A子が激しく泣いていたときも、A子の心はT雄とつながっていた。「こう考えると子どもを育てているということは本当に面白いことですね」とこの母親は言った。

保育の最中には大人も子どもとかわる状況の中に巻き込まれており、しばしば子どもが生きていた状況にまで眼を広げることができない。保育の後に、その状況を思い返すとき、保育者は状況から一步はなれて子どもの視点から見直すことができる。こうして、より広い自分をつくるのが保育者の大きな課題である。状況の中に埋没しているだけだったら保育者の自我の成長はない。一九九五年は、国連によって「国際寛容年」と定められている。これからの保育の質を向上させる上にも重要な課題である。

### 戦後五十年ということ

S 駅の前で、トラックの上から、戦後五十年たって、五十年前と現代とでは世界は違っているのに、国会が不戦決議をするなどは時代錯誤だという意味のことを右翼が演説していた。私は心の奥底に沸き上がる怒りを抑えながら通り過ぎた。

戦後五十年ということが新聞やマスコミで言われる。ひとつの時代の節目として反省し、ひとつひとつ丁寧に歴史の点検をする機会であることには間違いない。

今年こういうことが強調されるのは、この五十年の歴史を一生涯の中で体験して老年を

迎え、若かったときの自分の体験を重ね合わせて歴史の意味を問い直すことが生涯の内に可能になった長寿時代に現代が突入したこともひとつの理由であろう。

二十歳のときに体験した戦争を、歴史の断面を自分の身体で体験し、自分の未来への展望の中でそのことを見ていた——その同じ人が七十歳になって顧みたとき、その断面がより広い全体像の中で見えてくる。高齢人口が増えることによって、より広い視野で見る自我をもった人口が増すならば、知恵の蓄積も増すかもしれない。

戦後五十年のこの年に、OME P 世界大会が開催される。皆さんの参加を切に望んでいる。世界の人たちと共に、子どもの幸せと保育の原点を考える時としたい。

(愛育養護学校)

